

令和 6 年度 普及のあゆみ



令和 7 年 3 月 発行

は　じ　め　に

屋久島地域の農業普及事業推進につきましては、日頃より農業者の皆様をはじめ、関係機関・団体の多大な御理解、御協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

令和6年度は、4年余り続いたコロナ禍がようやく収束し、世の中はコロナ過前の日常を取り戻してきつつあります。しかし、屋久島の農業・農村を取り巻く情勢は、生産資材や燃料、配合資料等の高騰に加え、台風10号や高温等の気象災害による生産量減少の影響で依然として厳しい状況にあります。

このようななか本県におきましては、「かごしま未来創造ビジョン」や「かごしまの食と農の県民条例に基づく基本方針」の実現に向け、戦略的な取組を展開しているところです。

屋久島事務所農林普及課農業普及係では、これらを踏まえ、担い手農家や青年農業者、新規就農者の育成、屋久島の特色を生かした農産物の産地づくりに取り組んできました。

本冊子は、本年度に取り組んだ普及活動を掲載し、「普及のあゆみ」として取りまともので、地域農業の振興及び地域農業を担う経営体や組織の育成に活用いただければ幸いです。

終わりに、実証・展示ほの設置等に御協力いただきました農業者の方々、普及指導活動を展開するにあたり、御支援・御協力いただきました指導農業士をはじめ普及指導協力委員の方々、屋久島町、屋久島町農業委員会、種子屋久農業協同組合等関係機関・団体の皆様に、心より感謝申し上げます。

令和7年3月

屋久島事務所農林普及課

課長　上村　光秋

目 次

I 普及活動事例

- 1 屋久島を支える担い手の育成（経営体）・・・・・・・・・・・・・1
- 2 屋久島を支える担い手の育成（地域営農）・・・・・・・・・・・・・3
- 3 屋久島を支える担い手の育成（青年・新規）・・・・・・・・・・・・・5
- 4 サツマイモ基腐病等の被害軽減による産地維持・・・・・・・・・・・・・7
- 5 屋久島ばれいしょの生産安定・・・・・・・・・・・・・9
- 6 屋久島の特性を生かした果樹産地育成・・・・・・・・・・・・・11
- 7 環境に優しい茶産地の育成・・・・・・・・・・・・・13
- 8 屋久島の特性を生かした肉用牛産地づくり・・・・・・・・・・・・・15

II 実証・展示ほ等成績

- 1 ばれいしょのシストセンチュウ抵抗性品種の現地実証・・・・・・・・・・・・・17
- 2 ぼんかん「薩州」の着色向上対策の検討・・・・・・・・・・・・・19
- 3 茶の畑かん水の多目的利用の導入検討・・・・・・・・・・・・・21

III 参考資料

- 1 令和6年の主要作物生育経過・・・・・・・・・・・・・23
- 2 令和6年の気象データ・・・・・・・・・・・・・25
- 3 ミニ情報でつづるこの1年・・・・・・・・・・・・・27
- 4 令和6年度各種表彰について・・・・・・・・・・・・・34
- 5 令和6年度活動体制・・・・・・・・・・・・・36

I 普及活動事例

課題名 屋久島農業を支える担い手農家の育成（経営体の育成）

【成果の要約】

担い手の支援体制について、サポートチーム会を活性化し、支援対象者に対する具体的な支援策の検討や実践が進んだ。経営発展支援では、モデル経営体への継続的なサポートの結果、町の基本構想で掲げる農業所得を10戸中6戸が達成した。かごしま農業経営相談所との連携により、法人1戸で雇用体制の整備が進み、経営の多角化も実現した。また、女性農業経営士1名が認定され、家族経営協定も2戸で締結された。6次産業化支援ではトレイルミックスの作成、肉用牛生産直営店の開業、クルーズ船向けの販路拡大など具体的な成果を上げた。

1 対象

認定農業者 60 戸，モデル経営体 10 戸，パソコン簿記記帳対象 45 戸
家族経営協定農家 20 戸，6 次産業化志向農家 2 戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島農業を維持・発展させるためには、認定農業者を中心とした担い手の確保と育成対策が不可欠である。その中でも、地域をけん引するモデル経営体に対して経営改善指導を行い、稼ぐ力のある魅力的な農業経営を確立する必要がある。また、年間を通じた所得の確保や経営の安定を図るため、6 次産業化や複合経営の実践支援および検討を進めることが求められる。

3 活動内容

(1) 認定農業者等担い手の確保・育成

町アクションサポート会と連携し、担い手支援策の検討を行うとともに、認定農業者の確保に向けた経営改善計画の作成支援および研修会の開催、計画の実践支援を実施した。さらに、家族経営協定の推進や女性リーダー育成にも取り組んだ。

(2) 担い手の経営発展支援

モデル経営体 10 戸に対し、目標所得と経営計画の達成に向けた経営および生産技術の改善支援を行った。対象となる法人への事後支援として、かごしま農業経営・就農支援センターと連携し、就業体制の整備と経営の多角化による経営発展支援を実施した。

農業者の経営管理能力向上のため、パソコン簿記基礎講座から、応用研修（入力会）、決算研修と年間を通して活動を行った。また、経営発展のための制度資金相談については、生産者と複数回の個別面談を行い、経営改善計画作成につなげた。



パソコン簿記中級講座

(3) 6 次産業化への支援

経営の多角化による収益性の向上を図るため、6 次産業化への支援活動を行った。島内生産による新規商品開発や、生産された食肉の流通販売支援、お茶の新たな販路拡大対策に取り組んだ。

4 活動の成果

(1) 認定農業者等担い手の確保・育成

令和 6 年度はサポートチーム会を活性化し、支援対象者に対する具体的な支援策の検討や実践を進めた。認定農業者の確保については、法人化による新規認定者が 1 戸、6 戸が再認定された。一方で、高齢化や法人化に伴う辞退が 5 戸あり、令和 5 年度末時点で認定農業者は 56 戸となった。

家族経営協定の締結支援を行った結果、2 戸が締結に至った。また、女性農業経営士が 1 名認定された。



経営改善計画の作成支援

(2) 担い手の経営発展支援

モデル経営体 10 戸に対し、技術支援や経営分析など 5 年間の継続支援の結果、生産技術の向上や規模拡大等の成果が得られ、経営費の高騰や価格低迷等の影響はあったものの、町基本構想となる所得について 10 戸のうち 6 戸が達成した。また、対象者のうち、法人 1 戸に対しかごしま農業経営相談所を活用した支援の結果、雇用形態が整備され直売店 2 店舗、飲食店 1 店舗の開業につながった。

経営管理能力の向上を図るため、パソコンを活用した複式簿記に新たにに取り組む農家が 2 戸増加した。また、制度資金の相談活動と、計画作成支援を 6 件行い、3 件が貸付実行に至った。

(3) 6 次産業化への支援

6 次産業化支援では地域振興事業を活用し、島内で生産される果樹を利用したトレイルミックスの作成、上記した肉用牛生産直営店の開業、お茶のクルーズ船向けの販路拡大など具体的な成果を上げた。

5 今後の課題

(1) 認定農業者の確保・育成

認定農業者の確保については、認定新規就農者から認定農業者への経営発展支援を行うとともに、関係機関で連携しアクションサポートチーム会による支援体制の強化を図っていく。

(2) モデル経営体の目標達成支援

過去の経営評価を踏まえ、モデル経営の新たな選定と、稼ぐ力向上のための経営改善目標の達成に向けた経営・技術を継続支援する。

(3) 6 次産業化への支援

新たな重点普及計画に移行し、継続した 6 次産業化や新規販路拡大対策に取り組む。



クルーズ船への販路開拓



6 次産業化で飲食店開業

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

吉田，〇新川，片山，佐藤，下村

課題名 屋久島を支える担い手の育成（地域営農）

【成果の要約】

原地区における地域計画の取り組みについては、「地域班」と「農家班」の2チームに分けて活動を行った。地域班では、地域住民を対象に外部講師を招いて講演会「はるおの未来を考える」を開催した。農家班では、カンキツ収穫時期の労働力確保としてデイワーク（1日農業バイト）を1戸の生産者で試験的に導入している。

また、南部第2地区（高平、麦生、原、尾之間）の地域計画策定のための協議に参加した。

1 対象

原園芸組合役員 12戸 南部第2地区（高平、麦生、原、尾之間）

2 課題を取り上げた理由

原地区では、若手からベテラン生産者が集まり地域の将来について話合う「ビジョン会議」を定期的で開催しており、10年後の営農ビジョン実現に向けた取り組みを自主的に行っているため、地域計画のモデル地区として積極的に支援する必要がある。

原地区での成功事例を基に、他の地区の地域計画についても活動を進めていく必要がある。

3 活動内容

(1) 原地区における営農ビジョン実現のための支援

ア 地域班の活動

原地区を「農業」の観点だけでなく、「地域」としての観点からも見ることで地域の草刈りや電気柵の補修などの地域行事への理解及び参加者の増加を狙って、講演会を開催した。

イ 農家班の活動

タンカンの収穫時期（2月上旬～）やバレイショの収穫時期（2月末～）の労働力確保のために、日雇い農業バイトアプリを活用した取り組みを支援した。



ビジョン会議の様子

(2) 地域計画策定に向けた支援（南部第2地区）

地域計画の策定のための地域協議に参加し、情報提供等を行った。



各地域の協議の様子（右から 高平地区、原地区）

4 活動の成果

(1) 原地区における営農ビジョン実現のための支援

ア 地域班の活動

外部講師（熊本大学名誉教授：徳野貞雄氏）を招き、地域住民に向けた講演会「はるおの未来を考える」を開催した。約 50 名ほど参加し、アンケート調査から「地域のことを知ろうと思うようになった」「講演会をまた開催してほしい」という前向きな意見があった。



講演会の様子

イ 農家班の活動

カンキツ生産者 1 戸について、デイワーク（1 日農業バイトアプリ）のリモート研修及び登録を行い、実際に令和 7 年 2 月からタンカン収穫作業の募集を行った。アプリの使用感やマッチング等に関して、聞き取りを行い、島内でのアプリ活用のための取り組みに繋げていく。



バイト募集ページ

(2) 地域計画策定に向けた支援（南部第 2 地区）

各地区の協議においては、農業委員や区長を中心に活発な話し合いが行われた。農地については地図を活用して現状の確認と将来的にどうするかについて検討を行った。

5 今後の課題

(1) 原地区の活動支援の継続

(2) 地域計画の実践に向けた支援

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇吉田 佐藤

課題名 屋久島を支える担い手の育成（新規・青年）

【成果の要約】

青年農業者においては、果樹と野菜でそれぞれプロジェクト活動を行い、課題解決にむけた技術実証や経営面の改善などに取り組んだ。

新規就農者においては、3戸の経営計画達成に向け個別課題の改善に取り組み、今年度は新たに3名が認定新規就農者となった。

1 対象

屋久島農業青年クラブ 10 名，新規就農者 27 名

2 課題を取り上げた理由

担い手農家の高齢化が進む中，数少ない青年農業者には地域の農業を牽引することが望まれ，プロジェクト活動や組織活動を通して生産・経営管理技術や資質向上が必須である。また，高齢化等により農家の減少が予測される中，次世代を担う新規就農者の確保と育成は必須であり，就農相談の段階から営農定着・発展まで，関係機関と連携した円滑な支援が必要である。

3 活動内容

(1) 青年農業者・新規就農者の確保・育成

ア プロジェクト活動を通じた生産・経営管理技術向上支援

果樹部門では「ピタヤの栽培技術の検討」，野菜部門では「ばれいしょの生産安定技術の検討」のプロジェクト活動支援を行った。

イ 新規就農者受け入れ，支援体制の整備

新規就農者それぞれの経営・技術の課題把握のため，関係機関と巡回指導を行った。新規就農者励ましの会や基礎研修会，現地就農トレーナーと連携した部門別研修会を開催し，新規就農者の定着を支援した。



新規就農者励ましの会



基礎研修（経営）



トレーナー研修（左：野菜 右：果樹）

4 活動の成果

(1) 青年農業者・新規就農者の確保・育成

ア プロジェクト活動を通じた生産・経営管理技術向上支援

プロジェクト活動計画について、2名が地区青年農業者会議で発表した。各プロジェクトについて、指導農業士や青年農業者、関係機関との意見交換を行い、活動の参考とした。



青年農業者会議での発表（左：野菜 右：果樹）



バレイショ作業の様子



ピタヤ栽培先進地研修の様子

イ 新規就農者受け入れ・支援体制の整備

関係機関との支援体制の構築によって、過去 10 年の内に新規就農者の離農はなく、定着率は 96%を維持している。

5 今後の課題

(1) 青年農業者のプロジェクト活動の実践支援

(2) 新規就農者の個別課題解決支援

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

吉田，〇新川，片山，佐藤，下村

課題名 サツマイモ基腐病等の被害軽減による産地育成

【成果の要約】

サツマイモ基腐病等の対策として、関係機関及び酒造会社とのサツマイモほ場定期巡回や情報交換会の開催、抵抗性品種の導入推進・新規登録農薬の効果実証などを行った。

島内でのサツマイモ基腐病の発生ほ場は昨年より減少し、サツマイモの単収は昨年よりも増加し、サツマイモ基腐病発生前の水準まで回復しつつある。

1 対象

焼酎用サツマイモ生産者 8 戸 （重点対象農家 8 戸）

2 課題を取り上げた理由

屋久島には、三岳酒造と本坊酒造の 2 つの酒造会社があり、焼酎用サツマイモは畑作農家にとって重要な品目であった。しかし、サツマイモ基腐病等の発生・拡大によって生産性が低下している。そこで、サツマイモ基腐病プロジェクトチーム（以下 PT）の活動や実証試験等を通じて、病害虫による被害低減による生産安定・産地育成を図る必要がある。

3 活動内容

(1) サツマイモ基腐病 PT の活動強化

島内の全ての焼酎用サツマイモ育苗ハウス及び本ほを対象として、屋久島町役場担当者及び酒造会社関係者と一緒に、生育状況の確認のための巡回を行った。（月 1～2 回程度）生育に異常が見られた場合は、生産者と連絡を取り、農薬散布などの対応を促した。

また、サツマイモ生産者と酒造会社向けの「情報交換会」を開催し、サツマイモ生産に関わる情報共有や意見交換を行った。（年 5 回）



定期巡回の様子

(2) サツマイモ基腐病対策の技術実証

サツマイモ基腐病対策の技術確立のために、①抵抗性品種「みちしずく」の栽培実証と②フロンサイド SC の初期茎葉散布の効果実証の 2 つの実証試験を行った。



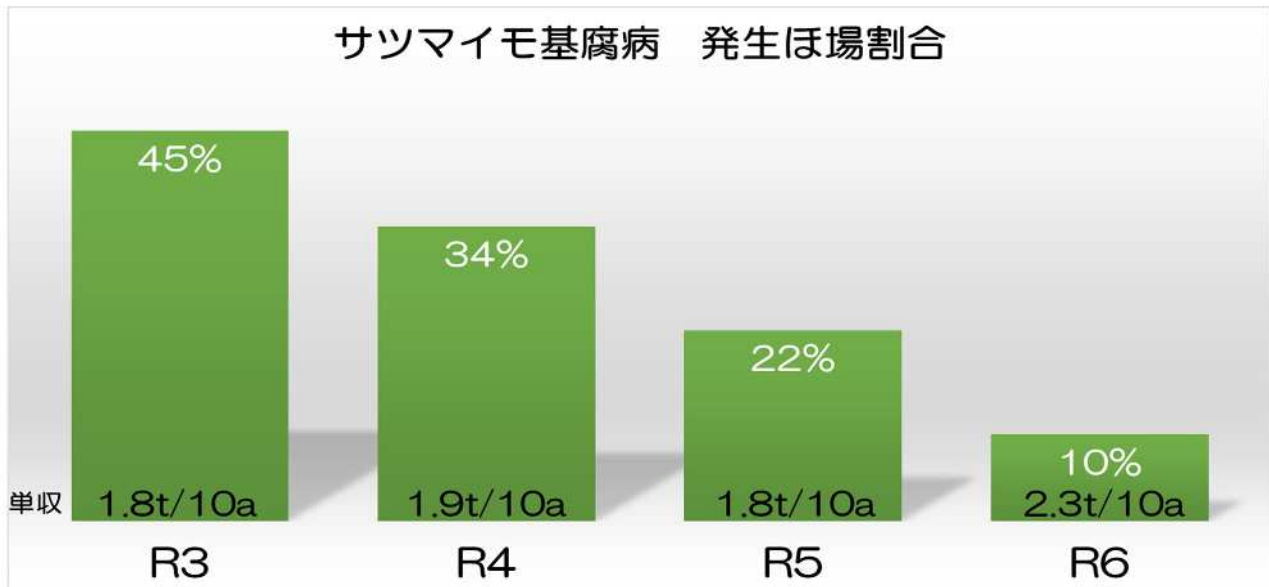
情報交換会の様子

4 活動の成果

(1) サツマイモ基腐病 PT の活動強化

5 月下旬にサツマイモ基腐病の発生が確認されたが、スポット的な発生であったため蔓延はしなかった。また、8 月末に台風の影響により病害虫の拡大が懸念されたが、大きな被害はなかった。

夏場の乾燥による生育不良及びハダニ類の発生などは見られたが、今年度のサツマイモの生育は例年と比べて順調であったため、島内のサツマイモ基腐病発生ほ場率は 10%程度まで抑えられ、島内の焼酎用サツマイモの単収は 2.3 t / 10a となった。



(2) サツマイモ基腐病対策の技術実証

① 抵抗性品種「みちしずく」の栽培実証

本坊酒造の生産者を対象に「みちしずく」の試験栽培を行った。慣行区の品種は「シロユタカ」とし、「みちしずく」との発病度や収量について比較した。結果として、収穫時のサツマイモ基腐病発病株率は「みちしずく」が3%、「シロユタカ」が0%となり、収量は「みちしずく」の方が「シロユタカ」に比べて約20%ほど高かった。

また、水田ほ場で栽培したサツマイモについては、どちらの品種も腐敗が多く発生したため排水不良ほ場での栽培は難しいことがわかった。

② フロンサイド SC の初期茎葉散布の効果実証

令和5年6月に、サツマイモ基腐病に対するフロンサイドSCの初期茎葉散布の登録が拡大したため、「みちしずく」において、定植から21日後・35日後の2回散布を行って、発病度を調査した。収穫時のサツマイモ基腐病発病株率は2%となり、発病抑制効果は高いことがわかった。

今後、サツマイモ基腐病対策として、サツマイモ栽培におけるローテーション防除に組み込むようにする。

5 今後の課題

- (1) サツマイモ基腐病対策の継続
- (2) 腐敗症状への対策検討
- (3) 生産安定のための単収向上に向けた取り組み

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

新川，片山，〇佐藤

課題名 屋久島ばれいしょの生産安定

【成果の要約】

バレイショの収量向上のため、土壌診断に基づいて牛ふん堆肥や石灰資材の施用などの推進を行い、新たに数名の生産者が牛ふん堆肥を施用してバレイショ栽培を行った。また、低コスト肥料栽培試験や強風対策の検討として実証試験に取り組んだ。

バレイショの疫病対策としてドローンによる委託防除を推進し、4戸の生産者で延べ面積11.2haのバレイショほ場の防除を実施した。

1 対象

JA 種子屋久 屋久団地野菜部会会員 23 戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島のバレイショは畑作の重点品目であるが、疫病や軟腐病等の発生及び強風被害による地上部の生育不良によって生産量が不安定である。そこで、土壌改良による生育向上やドローン防除による発病予防などの取り組みを行い、バレイショの生産安定を図る。

3 活動内容

(1) 土壌診断結果に基づく施肥の検討

バレイショ作付けほ場の土壌診断結果を生産者と確認し、改良に必要な資材等について検討した。昨年度の土壌分析から、屋久島の土壌は石灰（カルシウム）や苦土（マグネシウム）、腐植（CEC 等）が不足しているほ場が多いことが分かっているので、堆肥や苦土石灰等の施用を推進した。



土壌診断結果の説明

(2) 低コスト肥料の施用と強風被害の実証試験

コスト削減のため、堆肥入り低コスト肥料である「ベジリッチ」を使用した栽培試験と、強風被害対策として、エンバク（とちゆたか）をほ場周辺に設置する栽培試験を行った。



実証ほ場の様子
（11 月末のエンバク）

(3) ドローンによる委託防除の普及

出荷反省会時に野菜部会会員向けに、昨年度のドローン防除の結果を説明し、新たな防除希望者を募集した。

(4) バレイショ収穫機械の試験導入

バレイショの収穫作業の省力化のため、鹿児島県長島町で活用されているバレイショ収穫機械を貸し出してもらい、屋久島のバレイショほ場で利用可能かどうかを検討した。

4 活動の成果

(1) 土壌診断結果に基づく施肥の検討

数名の生産者のバレイショほ場において、牛ふん堆肥を約 2 t / 10a 投入してバレイショ栽培が行われた。

(2) 低コスト肥料の施用と強風被害の実証試験

ほ場の排水不良によって、生育初期から発芽不良が発生したものの、地上部の生育は「ベジリッチ」でも問題ない様子であった。

強風対策としてエンバクを活用したが、ほ場全体で均一に生育しなかったため品種の選定・排水対策等が必要であった。

(3) ドローンによる委託防除の普及

鹿児島経済連に防除を委託し、第 1 回目を令和 6 年 12 月 17 日、第 2 回目を令和 7 年 1 月 21 日に実施した。今年度はヒヨドリによる茎葉の被害が多かったため、それに伴う病気の発生が懸念されたが、ドローン防除を行ったほ場では収穫まで病気がみられなかった。

(4) バレイショ収穫機械の試験導入

バレイショ収穫機械の引き取り及び説明を受けるため、生産者と関係機関と一緒に長島町を訪問した。

2 月下旬より試験運用を開始し、2 反/日程度の収穫作業が可能である。屋久島の作付け体系に適合するかどうかを確認した上で、導入について関係機関と検討を行う予定である。



牛ふん堆肥の散布の様子



ドローン防除の様子



バレイショ収穫機械の試験運用の様子

5 今後の課題

- (1) 土壌分析の継続によるデータの蓄積
- (2) 牛ふん堆肥の継続施用による土壌環境の改善
- (3) ドローンによる委託防除の体系づくり支援
- (4) バレイショ収穫機械導入に向けた検討

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇佐藤

課題名 屋久島の特性を活かした果樹産地育成

【成果の要約】

- ・たんかんは、摘果モデル樹「適正着果量 18 果/㎡」の普及を進め、新規就農者を中心に島内6地区にモデル樹を設置し、普及を図った。
- ・ぼんかんは、エスレル散布による着色促進対策を図った。
- ・パッションフルーツは、収量安定と品種転換を進めたが生産量は減少した。

1 対象

果樹栽培農家 550 戸，JA 果樹部会 160 戸，JA パッションフルーツ部会 50 戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島では、たんかん、ぼんかん等のカンキツ類やパッションフルーツ等の果樹栽培が盛んである。その一方で、たんかんでは隔年結果、ぼんかんでは着色遅延、パッションフルーツでは単収向上が課題となっている。

3 活動内容

(1) たんかんの隔年結果対策技術の波及

令和5年度に作成した『たんかんの摘果マニュアル』を活用し、適正着果量 18 果/㎡を基準とした摘果モデル樹を島内6カ所（永田，小島，尾之間，原，麦生，高平）に設置し、摘果講習会や現地就農トレーナー研修で農家や関係機関への理解促進を図った。

(2) ぼんかんの連年安定生産技術の波及

秋季以降の高温による着色遅延の対策として、着色促進効果のあるエスレル散布を行った。また、水腐れが少ない“薩州”における効果を検証した。

(3) パッションフルーツの生産体制の確立

新規就農者1戸に対して、目標単収 1.5t/10a を設定し取り組んだ。また、“サマークイーン”から着果性の良い“ルビースター”への品種転換を進めた。

4 活動の成果

(1) たんかんの隔年結果対策技術の波及

令和2～3年度の調査結果から「適正着果量 18 果/㎡」で連年安定生産できることが明らかとなり、令和5年度に『たんかんの摘果マニュアル』を作成した。本マニュアルは、島内の果樹農家や新規就農者、青年農業者、関係機関等に合計 300 部を幅広く配布した。令和6年度には新規就農者を中心に島内6カ所（永田，小島，尾之間，原，麦生，高平）に摘果モデル樹を設置し、多くの農家に「18 果/㎡」の印象づけができた。

(2) ぼんかんの連年安定生産技術の波及

島内では、秋季以降の高温による着色遅延や降雨による水腐れ果の発生が栽培上の課

題となっている。現在の主力品種“吉田”から水腐れ発生の少ない“薩州”への改植を推進し、着色促進効果のあるエスレル散布の試験を2戸（南部・北部1戸ずつ）で実施した。今年度は散布日を11月上旬に固定したため、試験区と慣行区に大きな差異は見られなかったが、着色遅延時の対応策の検討が進んだ。

(3) パッションフルーツの生産体制の確立

島内の平均単収は352kg（令和5年）と低く、その一因として着果性の低い“サマークイーン”の導入率が高いことが挙げられる。そこで、着果性の良い“ルビースター”への転換を進め、新規就農者をモデルとした高単収農家の育成を図り、単収1.5t/10aを達成した。



新規就農者たんかん園地巡回



パッションフルーツの単収検討



ぽんかんエスレル散布の試験

5 今後の課題

- (1) たんかんの隔年結果対策技術の波及
摘果・低樹高化・幼木管理による産地の維持発展
- (2) ぽんかんの連年安定生産技術の波及
エスレル散布による着色促進効果の波及
- (3) パッションフルーツの生産体制の確立
“ルビースター”への転換と高単収農家の育成

6 担当した普及職員（〇はチーフ） 〇下村

課題名 環境に優しい茶産地の育成

【成果の要約】

- ・栽培基礎技術及び「屋久島茶」のPR活動を支援することができた。
- ・畑かん水の通水した地区に対し、畑かん水の多目的利用法や具体的な活用法を紹介することができた。

1 对象

屋久島茶業振興会 14戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島町の茶生産者は、有機栽培農家が半数を占める。茶の経営を安定させるためには慣行栽培・有機栽培の基礎技術習得が必要不可欠である。また、近年の茶市場価格の低迷を受け、茶市場における競争力の強化と多種多様な茶種の生産による市場外の相対取引先の確保が必要となっている。畑地かんがいの通水した茶園も広がっており、水利用法の周知も求められつつある。

そのため、農業者の栽培基礎技術向上、「屋久島茶」のPR活動、畑地かんがい水の多目的利用の支援を行った。

3 活動内容

(1)栽培技術向上支援

秋整枝検討会を開催し、秋整枝の意味や、秋整枝の位置などについて説明した。現地巡回指導では慣行園、更新園、有機茶園など茶園の状況に応じた秋整枝の方法について検討し、農業者の技術向上に努めた。

現地就農トレーナー研修では、指導農業士とともに、新規就農者に対し、茶園の管理法や秋整枝の時期や位置について指導した。



秋整枝現地検討会

(2) 「屋久島茶」のPR支援

「屋久島茶」のパンフレットを作成した。パンフレットでは「屋久島茶」の特徴を分かりやすく説明し、インバウンドや輸出向けに英語での説明文も追加した。

クルーズ船で「屋久島茶」のPR および販売を行い、屋久島高校の生徒たちの協力を得て「屋久島茶」のおもてなしも実施した。販売は好調だった。

また、博多駅、東京ビッグサイト、アミュプラザ広場で「屋久島茶」のPR および販売を行った。



歴史久きは材料自然遺産に登録されており、平均気温が約18.1℃、年間平均降水量は約4,000mmです。それは赤道熱帯気候であり、山は北緯であるにもかかわらず、日本列島の気候の異国となくもしています。この温暖さが他の地形や気候状況は、自然がよりよく見えます。

Yafusaka is a UNESCO World Heritage site. The coastal area around Yafusaka is 4,000 mm with an annual average temperature of 18.1°C. Yafusaka is a subtropical island. However, due to the mountain peaks form a subtropical climate similar to Subtropical. Yafusaka is a masterpiece of the climate of the entire Japanese Archipelago. Yafusaka is ideal for growing food due to its abundant rainfall and warm climate.

1 清らかな水で栽培
歴久ある年産の降水量が非常に多い地域です
雨水は山で自然にろ過され清らかな水が得られます
Water used for the production of tea comes from the abundant rainfall
from falling on the mountains is absorbed in the soil eventually trickling down
to the tea fields.

2 環境に配慮した栽培
屋久島では有機栽培が盛んにおこなわれています。
環境に配慮した栽培をしています。
Eco-friendly farming methods
Organic tea farming is very popular on Yakushima.

3 希少価値の高いお茶
鹿児島県は生産量が少なく、市場に出回る量が限られています
Highly sought-after tea
Yakushima Tea is produced in small quantities, and the amount available on the

「作るもの」の種類	活動の目的・ターゲット	提供先	提供物
絵の具遊び	絵の具が自然素材の粘土と水と油とで出来ていることを知る。 絵の具の性質を知る。絵の具で遊ぶ。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	絵の具、水、油、容器
文字の遊び	・横書きの字が左から右へ、縦書きの字が上から下へ、読みます。 ・文字の大きさや形が異なる。文字の並び方が異なる。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	文字のカード、紙、筆
図鑑の活用	・動物や植物の正しい名前を知ること。 ・動物や植物の生活の仕方を知ること。 ・動物や植物の生息地を知ること。 ・動物や植物の大きさを知ること。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	図鑑、紙、筆
算数の活用	・数字の読み書きの練習。 ・数字の大きさの比較。 ・数字の並び方の練習。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	数字のカード、紙、筆
理科の活用	・自然の観察。 ・自然の観察の仕方を知る。 ・自然の観察の場所を知る。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	自然の観察の道具、紙、筆
社会科の活用	・社会科の学習。 ・社会科の学習の仕方を知る。 ・社会科の学習の場所を知る。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	社会科の学習の道具、紙、筆
国語の活用	・国語の学習。 ・国語の学習の仕方を知る。 ・国語の学習の場所を知る。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	国語の学習の道具、紙、筆
英語の活用	・英語の学習。 ・英語の学習の仕方を知る。 ・英語の学習の場所を知る。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	英語の学習の道具、紙、筆
総合的な学習の活用	・総合的な学習の学習。 ・総合的な学習の学習の仕方を知る。 ・総合的な学習の学習の場所を知る。	大田区立東山小学校 〒118-0001 東京都大田区東山 1-1-1	総合的な学習の道具、紙、筆

屋久島茶のパンフレット

(3) 畑かん水の多目的利用支援

令和6年7月～8月に畑地かんがい用スプリンクラーを活用し、更新園の樹勢回復効果を実証した。更新園の乾燥時にスプリンクラー散水を行った区と行わなかった区で四番茶の収量を比較した。

4 活動の成果

(1) 栽培技術向上支援

新規就農者の茶園は指導農業士の指導や、適期の技術支援により充実した茶園に仕上がった。夏場の乾燥により、更新園の樹勢回復が遅れた園があった。地球温暖化や夏場の高温対策が課題となる。

(2) 「屋久島茶」のPR支援

作成したパンフレットはPRイベントで配布し、島内のお土産屋にも設置した。

令和6年度の屋久島へのクルーズ船寄港回数は20回で、今後もクルーズ船への販売を継続することが決まった。

(3) 畑かん水の多目的利用支援

スプリンクラー散水を行った園では、行わなかった園に比べ反収が100kgが増加した結果となった。夏場の乾燥時における更新園のスプリンクラー散水が樹勢回復に有効であることが分かった。

5 今後の課題

(1) 畑地かんがい水を活用した多目的利用

(2) 茶生産者の安定した経営支援

6 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇片山



就農トレーナー研修



クルーズ船へのPR活動



スプリンクラー散水

課題名 屋久島の特性を活かした肉用牛産地づくり

【成果の要約】

生産基盤の確保・育成

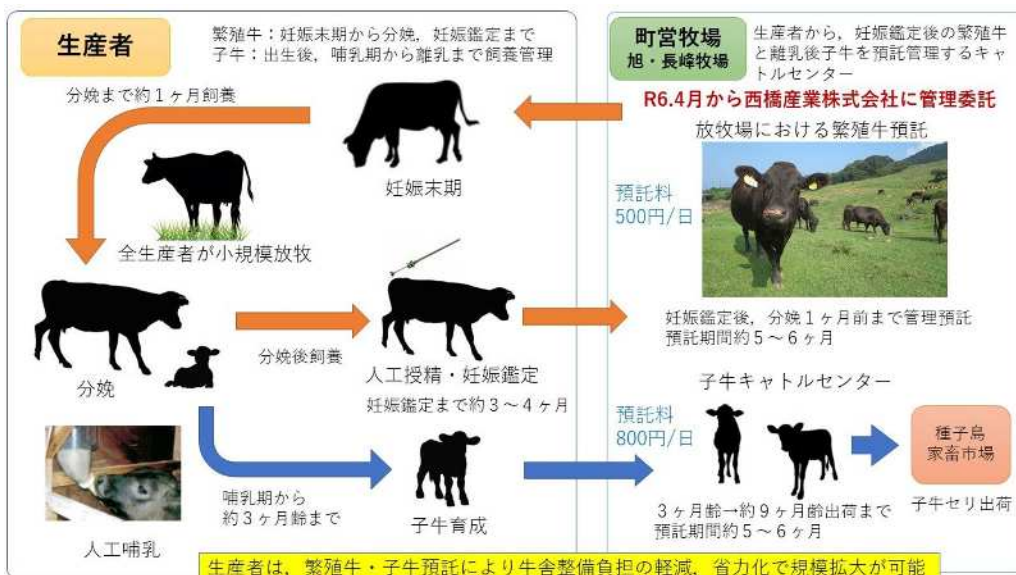
子牛価格の低迷が続く現状を踏まえ、高齢牛を中心に淘汰・更新を指導した結果、繁殖牛頭数は減少したが、経営の効率化に寄与した。また、法人や新規就農者に対しては、綿密な計画策定と実践支援を実施した。繁殖成績向上対策の結果、全国の改良組合表彰の対象となった。子牛商品性の向上では、子牛の発育成績は目標を上回り、市場においても熊本地域で最も高い取引価格を達成した。粗飼料確保の取り組みでは、過放牧の見直しを進め、草地の回復と適正頭数の維持につなげた。さらに、野菜生産者との連携により、新たな粗飼料生産基盤の確保にも成功した。

1 対象

屋久島町和牛振興会 22 戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島における肉用牛生産は、農業生産額で第2位を占める主要な品目である。しかし、生産者の高齢化が進行しており、後継者の確保や生産基盤の維持・拡大が急務である。また、離島という地理的条件から、飼料や生産資材のコストが割高であり、さらに多雨の気候により粗飼料の生産・調整が難しいことから、肉用牛経営に厳しい条件となっている。このような中、屋久島子牛の産地継続と収益性が高く魅力ある肉用牛経営を目指し、規模拡大を指向する生産者の育成による産地基盤の維持・拡大と、生産性及び子牛商品性の向上による収益性の改善に取り組んだ。



○生産者が全戸小規模な放牧地を設置（屋久島型放牧）しており、牛舎面積と施設整備費を抑制している。
○繁殖牛及び子牛預託により規模拡大が可能となり、粗飼料生産のための大型機械への投資も抑制している。
○生産者は牛の預託により、「分娩」と「人工授精」、「子牛の初期育成」に集中管理が可能となり、生産性向上が図れる。

（参考）町営牧場を活用した屋久島型の繁殖牛管理と子牛生産

(1) 肉用牛の生産基盤確保・育成支援

肉用牛生産基盤の維持が目標ではあるが、子牛価格の低迷に伴い、収益性確保のための高齢牛淘汰・更新を推進した。また、後継者の経営改善計画作成支援を行い、経営開始へ向けた準備と資格取得などの支援を行った。令和6年度からの町営牧場の民間委託を踏まえ、受託する肉用牛法人の経営安定化のため、雇用環境の整備と経営の多角化、

規模拡大と生産技術の向上支援を行った。

また、地域全体での繁殖成績向上と、ICTの導入支援を行った。

(2) 屋久島子牛の商品性向上

子牛の商品性向上に向けた飼養管理技術の定着へ向け、JAと連携し飼養管理指導を行った。またキャトルセンターの子牛発育向上へ向けて飼養管理指導も行った。また、子牛の損耗事故防止にも取り組み、2ヶ月齢時の全戸巡回と、キャトル受入時調査、セリ時調査により活動成果の確認を行った。



子牛セリにおける発育調査

(3) 屋久島における自給粗飼料の増加に向けた支援

少ない粗飼料面積を最大活用する生産体系の検討と、昨年から継続する屋久島に適した品種調査、町営牧場の効率的放牧計画の検討を行った。また、バレイショ生産者と連携して、バレイショ跡地への粗飼料生産に取り組んだ。

4 活動の成果

(1) 肉用牛の生産基盤確保・育成対策

生産基盤はやや減少したが、後継となる育成牛は確保され微減にとどまった。後継者の経営改善計画が策定され、経営が開始した。町営牧場の管理を受託する法人の雇用体系が整い、収益性向上へ向けた規模拡大と経営の多角化が実現した。また、地域ぐるみで繁殖成績の向上に取り組んだ結果、分娩間隔が町平均 387 日となり、繁殖成績において優良改良組合表彰を受賞した。

(2) 屋久島子牛の商品性向上

子牛の発育について、去勢で 1.11kg/日、めす 1.00kg/日と、良好な発育となった。また、市場においても高評価で、県平均より高値で取引された。子牛の死亡事故数も 51 件から 33 件に減少した。



(3) 屋久島における自給飼料の増加に向けた支援

2年間の調査で屋久島に適した品種（スーダン、シロヒエ、わい性ネピア）が明らかとなった。また、町営牧場の放牧において、過放牧がなくなり、母牛のボディコンディション向上と放牧地の土壌流出が減少した。作付体系の見直しとバレイショ生産者との連携等により、粗飼料が 300 ロール以上確保することができた。

バレイショ跡地の粗飼料生産

5 今後の課題

屋久島子牛の生産基盤を維持・拡大対策と、収益性向上のため生産・商品性向上対策の継続。自給粗飼料の増加対策の実施。畜産 ICT の活用検討。

6 担当した普及職員（〇はチーフ） 〇新川

Ⅱ 実証・展示ほ等実績

課題名 ばれいしょのシストセンチュウ抵抗性品種の現地実証

【成果の要約】

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種「しまあかり」を島内で試験的に栽培し、生育調査及び地域の生産者に向けた現地説明会等を開催した。

収穫量はニシユタカよりも低かったが、葉色や収穫したイモの見た目がニシユタカとは異なっていた。今後は、島内での「しまあかり」の普及を図る。

1 目的

バレイショ栽培の重要害虫であるジャガイモシストセンチュウは、北海道をはじめとして全国的に発生が拡大しつつある。そのため、屋久島地区においても当該害虫への抵抗性を持つ県育成新品種「しまあかり」について、実証ほや展示ほを設置し、現地適応性を実証すると共に地域の生産者へ周知する必要がある。

2 実証・展示ほの概要

(1) 設置場所及び担当農家

ア 実証ほ

屋久島町原地区 K 氏ほ場

イ 展示ほ

屋久島町安房地区 H 氏ほ場

屋久島町原地区 K 氏ほ場

屋久島町小島地区 I 氏ほ場

(2) 設置の概要

ア 実証ほ

品種	定植日	施肥	土寄せ
しまあかり	令和 6 年 11 月 5 日	基肥 ばれいしょ配合 4 袋/10a マルイ有機 23 袋/10a 追肥 複合燐加安 454 2 袋/10a	1 回目 11 月 27 日 2 回目 12 月 10 日
ニシユタカ	令和 6 年 11 月 5 日	同上	同上

・畝間 90cm，株間 20cm，10a 当たり株数 5,500 株程度

イ 展示ほ（原地区のみ）

品種	定植日	施肥	土寄せ
しまあかり	令和 6 年 11 月 20 日	基肥 ばれいしょ配合 4 袋/10a マルイ有機 23 袋/10a 追肥 複合燐加安 454 2 袋/10a	1 回目 12 月 10 日 2 回目 12 月 27 日

・畝間 90cm，株間 20cm，10a 当たり株数 5,500 株程度

(3) 調査項目

収穫量調査（1 株当たり個数，1 個重，規格別数量など）

3 調査結果等

(1) 収穫量調査

調査日：令和 7 年 2 月 12 日

品種	イモ 1 個重 (g)	株当たりイモ個数 (個)	単収 (t/10a)
しまあかり（11 月 5 日定植）	99.9	4.4	2.2
しまあかり（11 月 20 日定植）	75.1	4.9	2.1
ニシユタカ	157.9	5.6	5.2

※それぞれ、連続 5 株を 2 ケ所調査

(2) 現地検討会

展示ほを活用して、各地区で「しまあかり」の現地説明会を開催した。



現地説明会の様子（左：原地区 右：小島地区）



地上部の生育状況

収穫したイモの外観

（左：ニシユタカ 右：しまあかり）

4 考察

「しまあかり」は「ニシユタカ」と比べてイモの生育が遅く、「ニシユタカ」と同時期に収穫すると収量が低くなることが予想される。そのため、収穫適期の検討を行い、今後の生産計画について集出荷作業を担う JA 種子屋久と協議する必要がある。

5 普及性及び残された課題

「しまあかり」の種イモ確保が難しく、今年度の栽培試験は小規模であったため、10a 以上の規模での栽培試験を行う必要がある。

課題名 ぽんかん“薩州”の着色向上対策の検討

【成果の要約】

ぽんかんにエスレル1，000倍を11月上旬に散布すると着色促進の効果が得られる。

1 目的

ぽんかんは「屋久島ぽんかん」としてのブランドが確立しており、高い評価を受けている。一方で、秋季の高温による着色遅延が見られ、収穫期の遅れや安定供給に課題がある。そのような中、農業開発総合センターが開発したス上がりや水腐れが少ない品種「薩州」への改植が進んでいる。しかし、着色遅延の果実も多く、年内贈答需要への安定供給が課題である。そこで、エスレル（製品名：エスレル10）散布による着色促進の効果を検証する。

2 実証内容

（1）内容 ぽんかん「薩州」の着色向上

（2）設置場所 岩川博明園（北部・永田），日高正貴園（南部・原）の計2ほ場

（3）耕種概要

- ア 対象作物：試験区1 ぽんかん「薩州」15年～50年生
エスレル（製品名：エスレル10）1,000倍散布
有機酸カルシウム（製品名：スイカル）1,000倍加用
- 試験区2 ぽんかん「吉田」20年～50年生
エスレル（製品名：エスレル10）1,000倍散布
有機酸カルシウム（製品名：スイカル）1,000倍加用
- 対照区1 ぽんかん「薩州」15年～50年生
無散布
- 対照区2 ぽんかん「吉田」20年～50年生
無散布

区の構成：1区3樹2反復（北部1，南部1）

イ 作 型：露地

（4）調査項目

果皮色，果肉色，果実品質（糖度，クエン酸） 1区10果ずつ調査

調査日：11/6（散布日），11/14（散布後8日），11/27（散布後13日）

3 調査結果

（1）果皮色・果肉色

	果皮色	果肉色
無散布（吉田）	1	5
無散布（薩州）	2	6
無散布平均	1.5	5.5
エスレル散布（吉田）	2	6
エスレル散布（薩州）	3	7
エスレル散布平均	2.5	6.5

※オレンジカラーチャートによる（全13段階）



(2) 糖度・クエン酸

	糖度(°)	クエン酸(%)
無散布(吉田)	9.5	0.60
無散布(薩州)	9.7	0.69
無散布平均	9.6	0.65
イスル散布(吉田)	9.7	0.58
イスル散布(薩州)	10.2	0.76
イスル散布平均	10.0	0.67



※1区あたり10果ずつ調査

4 考察

今年のぽんかんは秋季以降の高温により着色遅延が著しく、イスレル散布による効果の検証を得やすい年であった。検証の結果、イスレルを散布した区では、果皮色・果肉色・糖度が高く、クエン酸は同程度だった。一方、無散布区では、果皮色・果肉色・糖度は低く、クエン酸は同程度だった。

農薬ラベルには、散布適期は「ホタル尻期」と記載がある中で、11月上旬と時期を決めて散布する効果の検証ができたが、本年の散布適期は11月中旬以降が妥当と考えられた。

5 残された課題

散布適期の検証



課題名 茶の畑かん水の多目的利用の導入検討

【成果の要約】

夏場の乾燥時に、二番茶後の更新園にスプリンクラー散水を行うことで樹勢が回復し、四番茶の収量が増加した。今後の温暖化や夏場の高温時における樹勢回復に、スプリンクラー散水が有効であることが実証できた。

1 目的

永久保地区は、令和4年10月に中山間総合整備事業によって畑かん工事が完了し、茶園に通水された。この地区には茶農家が3戸存在する。屋久島の茶園における畑かんの活用技術に関する知見は乏しい。今回、更新園の夏場の乾燥対策として、スプリンクラー散水の活用を茶農家3戸への導入について検証する。

2 実証・展示ほの概要

(1) 実証地区

永久保地区

(2) 調査対象

永久保地区の茶生産者3戸（うち、モデル農家1戸）

(3) 対象園

おくみどりの更新園

(4) 調査内容

おくみどりの更新園において、散水区と無散水区に分けて四番茶の生葉収量を比較した。散水は昼間に3時間行い、夏場の乾燥時に7月18日、19日、22日、30日、8月5日、7日の計6日実施した。摘採は8月9日に行った。

(5) 調査期間

令和6年7月18日～8月7日



更新園



散水区

3 調査結果

スプリンクラー散水を行った園では、行わなかった園に比べ反収が約 100kg が増加した結果となった。夏場の乾燥時における更新園のスプリンクラー散水が樹勢回復に有効であることが分かった。

	品種	面積(a)	摘採日	数量	反収
無散水区	おくみどり	7.8	8月9日	242	310.3
散水区	おくみどり	31.9	8月9日	1,164	364.9
散水区	おくみどり	25.3	8月9日	1,186	468.8

4 考察

今回の結果から、今後の温暖化や異常気象による夏場の高温対策として、スプリンクラー散水の活用が有効であることが分かった。屋久島の強みである豊富な水源を活用し、畑かん水の多目的利用が今後さらに重要になると考えられる。

5 普及性及び残された課題

畑かんの多目的利用を検討する。令和 5 年度には、スプリンクラー散水によるチャノホソガの防除を検証した。令和 7 年度には、クワシロカイガラムシのスプリンクラー散水による防除を検証する。また、畑かん水を利用した施肥効果の向上も検証する。

III 參考資料

Ⅲ 参考資料

【令和6年の主要作物生育経過】

果 樹

【ぽんかん】

昨年と同じ4月10日に満開となり，着花量は有葉花主体で，最終的な着果量は平年の5～7割程度となった。

果実肥大は前半から平年より高く推移し，大玉傾向となった。果実品質は秋季の降雨や台風による落果を受け，低糖低酸傾向であった。

8月27～30日に台風10号が襲来し，387mmの降雨をもたらし，風傷果や落果，老木の倒伏など多くの園地で被害が発生した。

10月以降の平均気温は平年より高く，着色遅延が見られた。

【たんかん】

昨年より7日早い4月1日に満開となり，着花量は直花が7割と多く開花時期のばらつきが見られた。最終的な着果量は平年より少なかった。

果実肥大は平年並みで推移したが，島内全体でみると M-L 玉が多く，小玉傾向になった。果実品質は低糖低酸傾向であった。

ぽんかん同様台風10号の影響で，風傷果やかいよう病，老木の倒伏が見られた。



たんかん果実品質

たんかん 糖度（度）	R2	R3	R4	R5	R6	平均
11月中旬	-	8.5	8.6	9.1	8.0	8.6
12月中旬	9.0	9.9	9.5	11.0	8.7	9.6
1月中旬	9.7	11.2	10.4	11.8	10.1	10.6

クエン酸 （%）	R2	R3	R4	R5	R6	平均
11月中旬	-	2.05	1.52	1.40	1.31	1.57
12月中旬	1.06	1.33	0.87	0.76	0.78	0.96
1月中旬	1.20	1.16	0.78	0.76	0.58	0.90

ぽんかん果実品質

ぽんかん 糖度（度）	R2	R3	R4	R5	R6	平均
10月中旬	-	9.5	9.1	9.4	9.2	9.3
11月中旬	10.0	10.5	9.8	10.3	9.7	10.1
1月中旬	1.20	1.16	0.78	0.76	0.58	0.90

クエン酸 （%）	R2	R3	R4	R5	R6	平均
10月中旬	-	1.61	2.52	1.54	1.43	1.78
11月中旬	1.10	0.93	0.94	0.73	0.70	0.88
1月中旬	1.20	1.16	0.78	0.76	0.58	0.90

茶

令和 6 年産一番茶は、4 月と 5 月の曇天や降雨が多く、天候の合間を見ての被覆作業となった。そのため、早めに被覆した圃場では下位芽の伸育が緩慢となり減産傾向となった。また、被覆が遅れた圃場では被覆効果が得られず、品質低下が見られるなど、生産に苦慮した年となった。被覆後の色乗りが進まず、摘採計画が難航したところもあったが、摘採開始は 3 月 30 日となった。

二番茶は、一番茶摘採後に夜温の高い日が多く、一番茶で頂芽優勢が顕著だった圃場を中心に生育が前進化し、一番茶後 43 日頃から生産が始まった。例年と異なり、梅雨入り後も降雨の影響をほとんど受けず順調に進んだ。

年間を通して生葉を集約し、二番茶を緑茶荒茶ラインによる紅茶製造の取り組みによりコスト低減に成功した生産者もあった。また、三番茶を摘採しない試みを通じて、茶工場の稼働日減少によるコスト削減と年間の収量増加が実現した。

茶工場操業の効率化を図る一方、茶園管理では更新を進め、茶樹の樹勢回復に努めた。しかし、夏場の乾燥時の影響で更新園の芽の生育が遅れている園も見受けられた。

今後、需要の増加が見込まれる有機栽培の面積は増加傾向にある。

各茶工場では商品開発や販路開拓の取り組みが進められている。今年度は、クルーズ船での「屋久島茶」の販売 PR 活動を実施した。また、博多駅、東京ビッグサイト、アミュプラザ広場でも「屋久島茶」の PR および販売を行った。

野 菜

【ばれいしょ】

定植準備時期である 9 月下旬から定植時期である 10 月中下旬にかけて、平年より降水量が多く、地域全体で定植作業が遅れた。一方で、11 月からの降水量は平年よりも少なく、疫病や軟腐病、菌核病などの発生は少なかった。

12 月頃からヒヨドリによる食害が鹿児島県内でも多く報告され、屋久島地区においてもほぼすべてのバレイショほ場で被害が確認された。定植の遅れやヒヨドリの被害によって、生育が遅れたため小玉傾向が予想され、出荷計画量 512 t より少なくなる見込みである。

【やまいも】

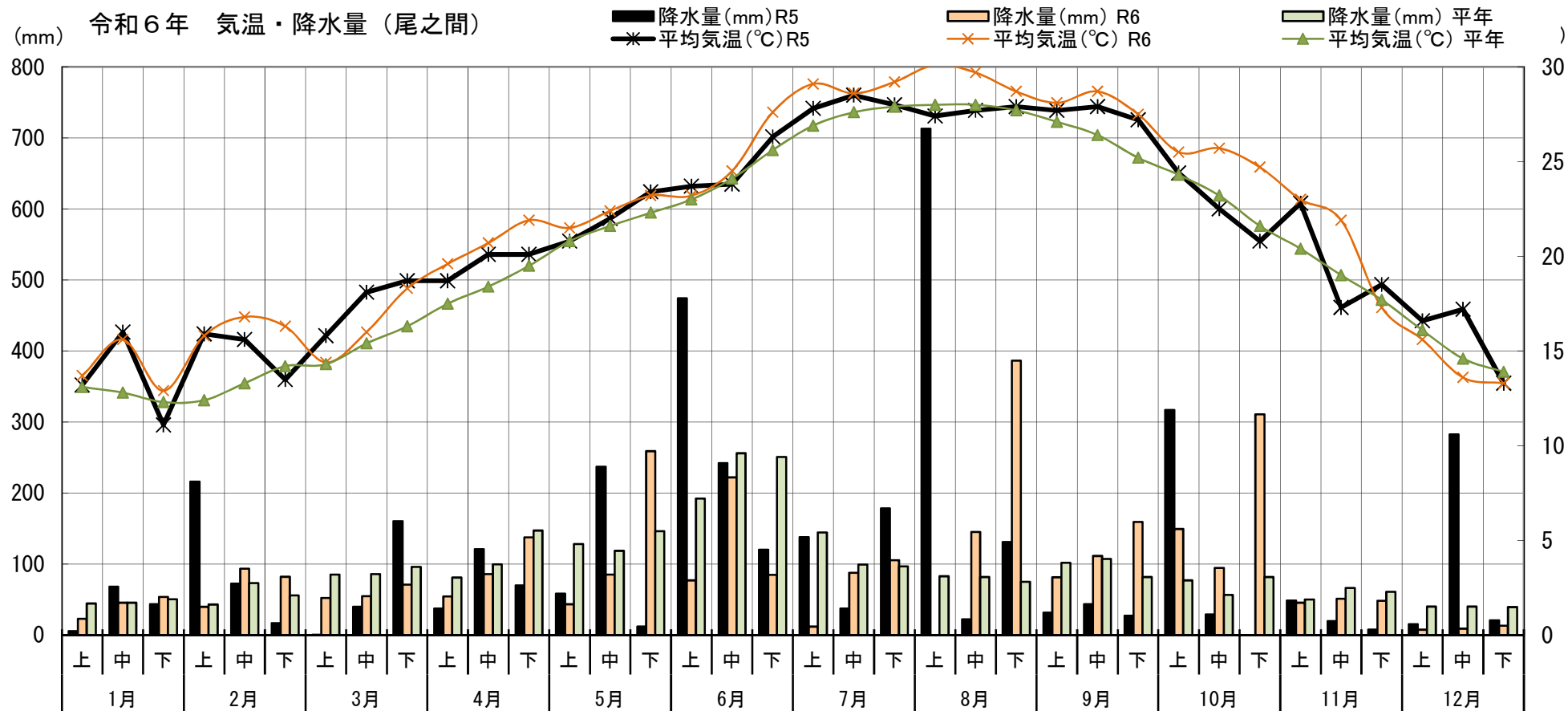
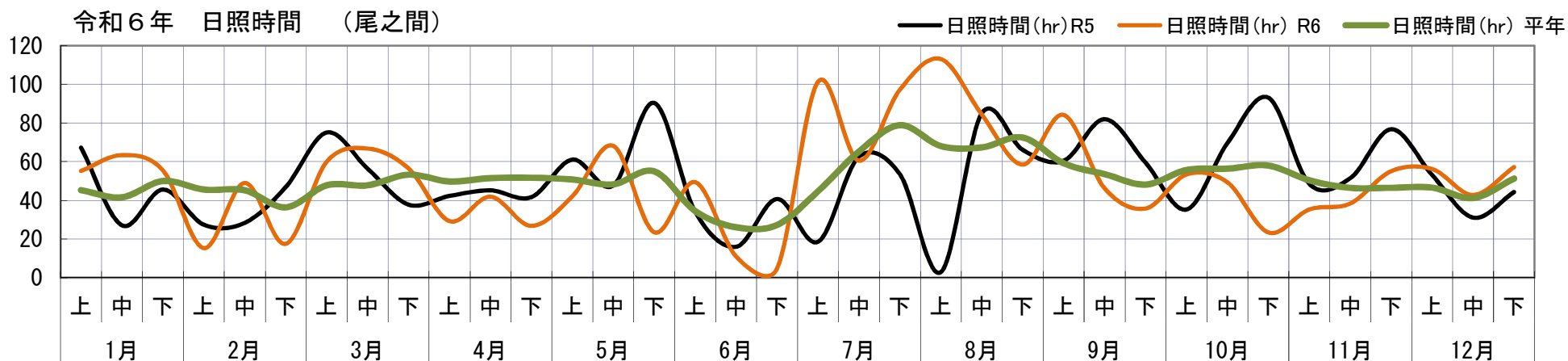
4 月末から 5 月上旬にかけて定植され、8 月末の台風 10 号の影響によって一部のほ場で地上部に被害があったが、その後の生育は概ね順調であった。出荷先メーカーの要請で栽培面積は 2 ha 未満に調整されている。単収は個人差が大きい土作り等の基本技術の見直しが必要である。出荷量は t 前後となる見込みである。

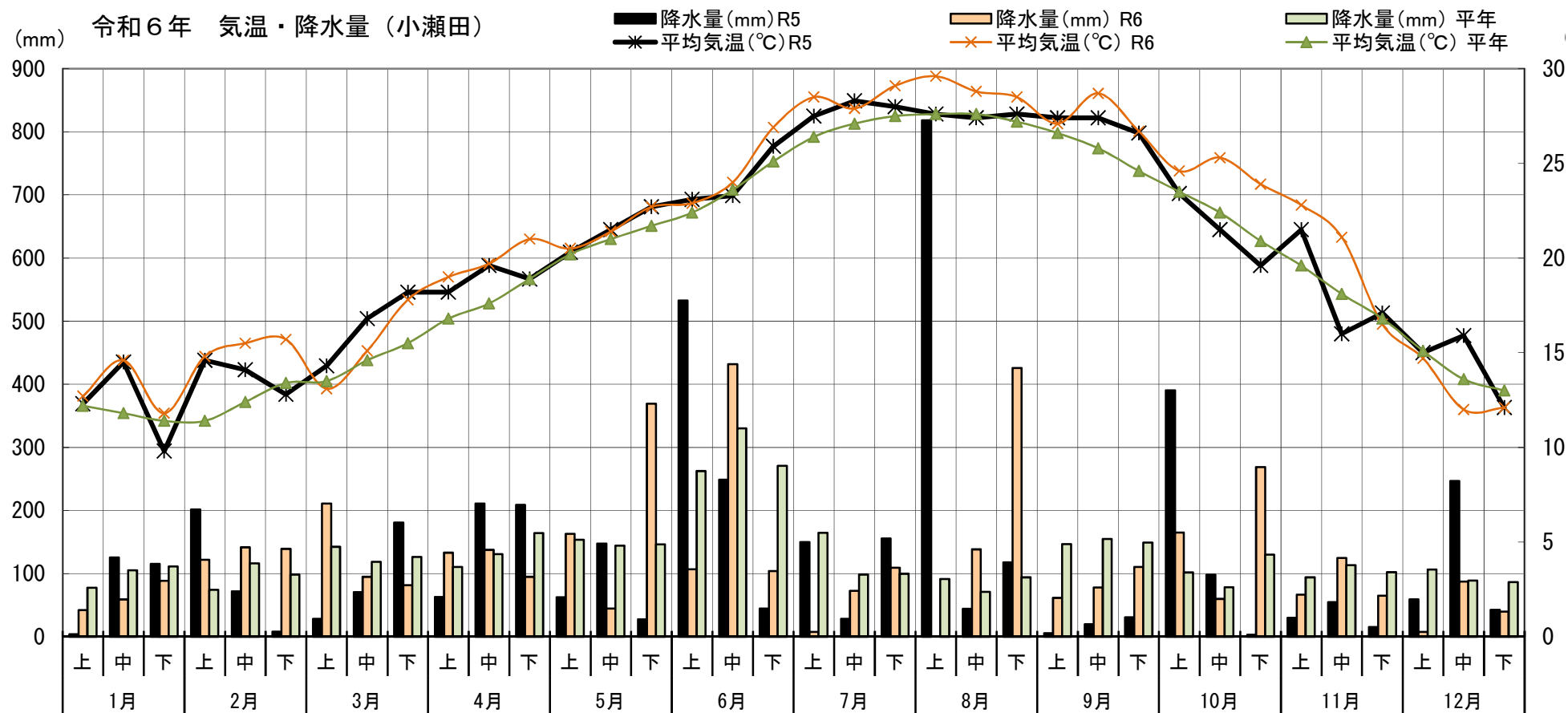
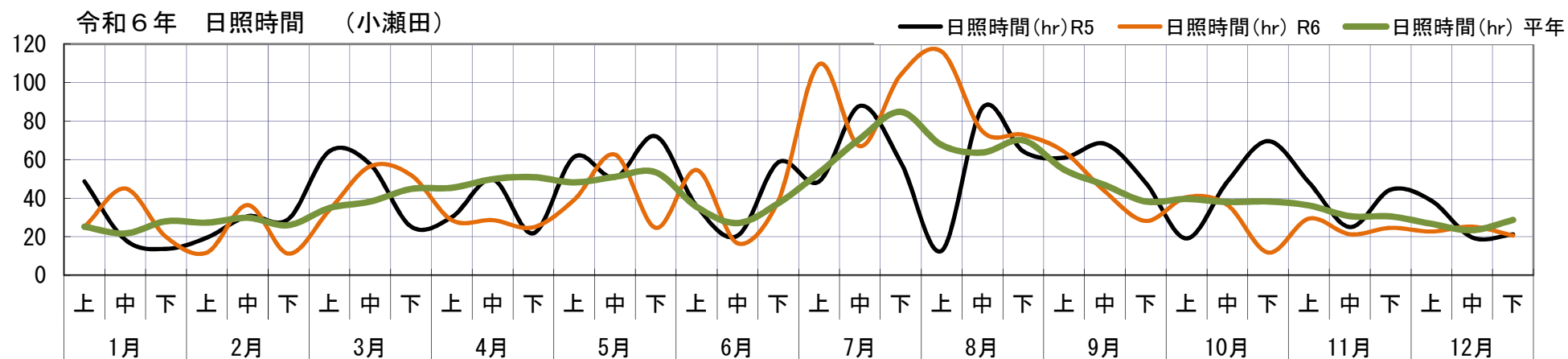
【焼酎用さつまいも】

サツマイモ基腐病抵抗性品種「みちしずく」の普及が拡大したことや、「3 ない運動」の徹底により屋久島におけるサツマイモ基腐病の発生ほ場は全体の約 10% 程度までに抑えられた。夏場の乾燥によって地上部の生育不良や一部のほ場でのハダニ類の発生が見られたが、生育は概ね順調であった。島内の焼酎用サツマイモの平均単収は 2.3t/10a となり、サツマイモ基腐病発生前の水準まで回復しつつある。

【実えんどう】

播種後の高温・降雨によって発芽不良やウラナミシジミ・ヨトウ類による食害、根腐れ病などによる生育不良が発生した。11 月からは気温も低くなり、降雨も少なくなったため生育は順調であった。年明けからヒヨドリによる食害や霜による被害が多少あったものの、例年並みの収穫量が確保できた。





【ミニ情報でつづるこの1年】

4月



R6年産の一番茶について

屋久島の一番茶は3月30日にスタートした。県鹿児島茶市場における、屋久島茶の実績は、出回り量対比で昨年より160円/kg高い平均単価2,300円/kg（4月18日累計）である。生産者らは天候に合わせて被覆期間を延長をするなど、良質な茶を作るよう工夫している。今後も農林普及課では所得向上に向けて、関係機関・団体とも連携し、栽培・加工コストの削減、相対取引などの販路拡大等を通じた取引価格向上の支援を強化していく。

R6年産の焼酎用サツマイモについて

屋久島の焼酎用サツマイモの定植が4月上旬より始まった。今年度は、3月の定期的な降雨のため施肥作業や畝立て作業等が難航し、例年より2週間程度作業が遅れている。サツマイモ基腐病対策として、抵抗性品種「みちしずく」の導入が進んでおり、令和6年度作付け面積の7～8割で「みちしずく」を定植する見込みとなっている。

今後は、育苗ハウスや本ぼの生育状況調査や巡回指導により、サツマイモ基腐病の発生警戒を行うと共に、講習会にて情報交換等を実施していく。

5月



屋久島和牛振興会研修

5月13日から14日の2日間にかけて、屋久島和牛振興会による視察研修を実施した。屋久島の子牛を購入し肥育を行っている指宿の肥育農場を視察し、屋久島産牛の発育の状況を確認したほか、鹿児島中央家畜市場における出荷子牛の血統や発育の状況、また屋久島で主に飼養している民間種雄牛会社に出向き種雄牛の特徴について研修を行った。生産者からは研修先に対し活発な質問がなされた。今回の研修を生かし、今後の高評価を得られる屋久島子牛生産につなげていく。

ビジョン会議で営農に係る課題を検討

5月28日原園芸組合でビジョン会議が実施された。昨年度の労働アンケートで課題となった雇用者が利用するトイレの課題や雨天時の作業等について検討した。トイレは簡易トイレと既存施設を組み合わせる等一定の解決策が出された。更に地域計画で作成した目標地図について規模縮小希望農地の取得希望者の進捗状況を確認した。原園芸組合では、地域営農仕組みづくりに向けて定期的にビジョン会議を実施している。今後は以前作成したビジョン実現に向けた具体的事項の改定も行う。

口永良部島の肉用牛生産跡地調査

5月28日原園芸組合でビジョン会議が実施された。昨年度の労働アンケートで課題となった雇用者が利用するトイレの課題や雨天時の作業等について検討した。トイレは簡易トイレと既存施設を組み合わせる等一定の解決策が出された。更に地域計画で作成した目標地図について規模縮小希望農地の取得希望者の進捗状況を確認した。原園芸組合では、地域営農仕組みづくりに向けて定期的にビジョン会議を実施している。今後は以前作成したビジョン実現に向けた具体的事項の改定も行う。

6月



経営発展研修会の開催

6月10日、屋久島経営者クラブと、屋久島事務所主催の経営発展研修会を認定農業者や新規就農者、関係機関を対象に屋久島事務所にて開催し、23名が参加した。普及係による屋久島農業生産の現状と課題について説明後、かごしま農業経営・就農支援センターを通じて派遣された社会保険労務士の山崎研市先生による法人等の農業経営に必要な雇用管理と各種保険の概要について講演があった。参加者は研修内容に熱心に聞き入っていた。今後も個別に経営発展の取り組みを続けていく。

サツマイモ基腐病対策としての本ほ巡回調査

6月10日、サツマイモ基腐病発生状況確認のため島内の全サツマイモほ場の巡回を行った。本年度は、酒造会社の工場長及び焼酎仕込み部門責任者も定期的に巡回に同行してもらうことで、生育状況の把握や生産者とのコミュニケーションの機会を増やす取り組みを併せて行っている。

また、発病株を発見した場合は関係機関で抜き取り対応を行い、直ちに生産者へ連絡及び対応を指導するなどして蔓延防止に取り組んでいる。今後も、定期的な巡回調査及び対応を行っていく。

現地就農トレーナー研修（果樹）を開催

6月12日、現地就農トレーナー研修（果樹）を屋久島事務所で開催した。研修には、就農予定を含む果樹新規就農者6名、指導農業士2名ほか計10名が参加した。内容は、果樹の情勢やたんかん経営の考え方、基本的栽培技術など多岐に渡った。参加者からは「内容にボリューム感があったが、知らないことも多く勉強になった」との声が多く聞かれた。屋久島の果樹新規就農者はここ数年増加傾向にあり、今年度は複数回に分けてトレーナー研修を開催し、知識・技術の習得を図る。

7月



経営者クラブと農林普及課交流会の開催

7月3日、尾之間ふれあいすこやかセンターにおいて、経営者クラブと農林普及課の交流会が開催され、14名が参加しグラウンドゴルフ競技を通じて親睦を深めた。また、競技終了後は麦尾公民館で懇親会もあり、経営者クラブ員の生産した野菜などの料理が振る舞われ、相互の意見交換に華が咲いた。今後は若手の生産者など参加者の範囲を広げ、新規クラブ員の会員確保につなげたい。

果樹スマート農業と肥料情勢を紹介

7月16日、原公民館および現地ほ場で原園芸組合の夏季講習会が開催され、組合員16名や関係者等計20名が参加した。室内研修では農林普及課より、果樹スマート農業の事例と肥料情勢について説明した。現地研修は町営尾之間試験園で、たんかんの省力園地づくりに向けた密植栽培や機械化体系の植え方等について検討した。原園芸組合は屋久島を担う生産者も多く含まれており、地域のモデルとなるような普及活動を展開する。

茶生産者が売り場づくりセミナーに参加

7月9日、屋久島環境文化村センターにおいて、「売り場づくりセミナー」が開催され、茶生産者ら11人が参加した。セミナーは、展示販売会等での商品の陳列方法を学ぶことができる。参加者らは自社の商品を持ち込み、展示会等を想定して陳列や装飾し、参加者らで意見交換を行った。熊毛支庁では、10月にはGOOD LIFE フェアへの出展が計画されており、熊毛地区より、6事業者が選定される。今後も、セミナー等を活用し、茶の販売拡大支援を継続していく。

8月



令和6年度屋久島畜産共進会の開催

8月2日、町営旭牧場において第7回となる屋久島畜産共進会が開催された。第1区では満園武男さんのはるみ号、第2区では満園明さんのまいこ号、成雌区では満園明さんのあさひ530号がそれぞれ1席に輝いた。9月4日に開催される郡の共進会では、1区と2区の1席が選定され、グランドチャンピオンには2区の1席が選ばれた。屋久島は生産者は少ないが、出品牛は全て発育良好で資質に富んだ牛が出品された。郡の共進会においても好成績が期待される。

令和6年度地域農業を語る会屋久島会場の開催

8月6～7日の2日間、熊毛地域農業を語る会屋久島会場が開催された。54名の参加で「農業の稼ぐ力を高めよう」をテーマに、初日の室内研修では、屋久島から2事例、種子島1事例の発表があり、稼ぐ力について相互討論の後、農政部長から講評いただいた。二日目の現地研修では、屋久島の特徴を生かした畜産や茶などの生産の現場を視察した。情報交換会では町の生活研究グループによる料理提供があり、地元料理を楽しんだ。会を通して活発な意見交換がなされ有意義なものになった。

親子2戸の家族経営協定が締結される

8月26日、屋久島町本庁舎において、家族経営協定締結式が行われた。締結農家をはじめ、農業委員や関係機関などが立会を行い、和やかな雰囲気の中で、親子2戸の農家が協定を結んだ。締結農家は決意表明の中で「次代につながるよう、農業をやってきた。これから親子で力を合わせて頑張りたい。」と力強く宣言した。協定を契機に経営発展に向けて関係機関がサポートしつつ、円滑な営農活動ができるように取り組んでいきたい。

9月



3人新規就農者を励ましの会で激励

9月3日、令和6年度新規就農者励ましの会を、屋久島町営農支援センターで開催した。今年度は、3人の新規就農者を迎えることができた。3人は20代から30代のUターン者であり、基幹産業の持続的発展を目指し、決意を新たにしていた。会には、新規就農者をはじめ、指導農業士、農業青年クラブ、町等、計20人が出席し、新規就農者らを激励した。新規就農者からは、「スマート農業を活用し、町の特産品を守る」と抱負を語った。

青年農業者会議を開催

9月3日、令和6年度青年農業者会議を、屋久島町営農支援センターで開催した。今年度は「ばれいしょの生産安定技術の検討」「ピタヤの栽培技術の検討」の2つのプロジェクトについて計画の説明を青年農業者が行った。発表後は、プロジェクトの内容について指導農業士や関係機関の方々から質疑応答を含めたアドバイスをもらい、「良い実績報告を期待している」と激励の言葉を頂いた。

10 月



「YAKUSHIMA とれ〜るミックス」が出来ました

10 月4日、屋久島島内のお土産店において、「YAKUSHIMA とれ〜るミックス」の商品発表会を開催した。本企画は、令和6年度地域振興推進事業を屋久島高校の生徒 12 名が商品名やパッケージデザインを手がけ、地元事業者が本来廃棄される果実の皮を使用した製造開発に取り組み、食品ロス削減と売上金の一部を山岳保全に寄付するという屋久島のロールモデル事業として行った。関係者からは屋久島の自然環境とSDGsにも結びつくユニークな取り組みとして評価された。

6 次産業化の取り組み、屋久島産黒牛・黒豚を使ったランチのスタート

10 月5日、屋久島の肉用牛法人である西橋産業株式会社が経営の6次産業化の一環として、平内海中温泉横に焼肉にしばしをオープンし、屋久島産の黒牛・黒豚を使用したランチをスタートした。同社は、子牛価格の低迷の中、収益性確保のため6次産業化に踏み切り、今年4月に食肉販売を開始していた。価格も比較的安価に設定し、観光客だけでなく地元にも愛される店を目指している。農林普及課としては今後も6次産業化の支援を継続すると共に畜産経営の安定化を図っていく。

屋久島の果樹園をドローンが飛ぶ

10 月7日、屋久島町の現地ほ場においてドローンのデモ飛行を行った。新規就農者5名、指導農業士1名、関係者2名が参加した。大型のドローンがほ場を飛行する様子に一同が注視し、オペレーターから飛行状況について、随時説明があった。果樹におけるドローンの活用事例は全国でも少ないが、今後屋久島においてもドローンを活用した薬剤散布が進むことも予想される。まずは農業者に「見せる」ことで、ドローンが樹園地の省力化の一役を担うよう期待したい。

指導農業士が果樹新規就農者を巡回

10 月7日、指導農業士1名が果樹新規就農者2名の園地巡回を行った。指導農業士が自身の経験に基づいた話を新規就農者の樹園地も見ながら行い、新規就農者は聞き入っていた。また、身近な農業の疑問や作業の手順などを対話形式で行い、実践に即した内容であった。新規就農者は「身近に相談できる農業の先輩の存在は大きい」と感想を述べた。一方の指導農業士は、「島内の農業者が高齢化する中、新規就農者は宝物。みんなで育てる」と話し、新規就農の参入を歓迎した。

屋久島ぽんかん導入 100 周年記念式典が開催される

10 月14日、屋久島町尾之間中央公民館において、屋久島ぽんかん導入100周年記念式典が開催された。会には、鹿児島大学の教授をはじめ、県議会議員、市場関係者、地元関係者、関係機関、一般観覧など、総勢約200名が出席した。地元中学生による吹奏楽演奏を皮切りに、関係者の式典あいさつ、鹿児島大学教授による記念講演、パネルディスカッション、演劇、踊りなどが行われた。式の最後には、ぽんかん100年木を管理する園主のあいさつで結び、盛大な式典となった。

屋久島町茶業振興会で秋整枝検討会を実施

10 月18日、秋の茶園管理研修会を屋久島事務所及び現地ほ場で開催し、茶生産者ら17人が参加した。茶園管理研修会は、室内研修で秋整枝の基本技術と再萌芽対策について説明した後、現地研修を実施した。現地研修では、慣行園、更新園、有機栽培園での秋整枝の方法について検討した。これまでの摘採回数、時期などの管理状況や秋整枝の深さ等について生産者からの意見や質問が出され、活発な会となった。今後も、技術支援を継続し、茶生産者の経営に貢献していきたい。



サツマイモ基腐病情報交換会の開催

10月30日に営農支援センターにて、サツマイモ基腐病情報交換会を開催した。今回で第3回目となり、これからの本格的な収穫を前に事前の試し掘りの結果や収穫後の管理等について情報交換を行った。サツマイモ基腐病の発生は「3ない運動」の徹底によって、ここ数年で収まりつつあり、地域の単収も改善しつつある。今後もサツマイモ生産者・焼酎メーカー・関係機関との連携を密にとりながら活動していく。

屋久島食の文化祭の開催

11月8日、屋久島町生活研究グループと屋久島つわぶき会の共催で屋久島食の文化祭が支援センターにおいて開催された。各組織から13名が「我が家の一品」と称して創作料理を持参し、それぞれ意見交換や試食等がなされた。

さつまいもでん粉を使っただんごやピタヤ・スターフルーツを使ったデザート、鹿肉の竜田揚げなど珍しい一品も披露され、作り方を聞くなど活発な意見交換がなされた。なお、当日は令和6年度新規就農者を招待し、料理でもてなして就農を祝った。

徳之島のピタヤを視察

11月18～19日、屋久島のピタヤ栽培有志グループ（ACCY）4名と屋久島事務所職員1名が徳之島を視察した。本活動は、希少フルーツポテンシャル向上支援事業を活用し、先進地研修としてピタヤ栽培が盛んな徳之島を選定した。当日は、徳之島事務所の担当者からピタヤの概要説明を受けた後、ピタヤ農家2名の園地を視察した。農家間の交流では、栽培上の課題や仕立て方、販路など活発な議論がなされた。ピタヤ栽培の生の情報が得られ、今後屋久島での栽培に活用する。

屋久島農業青年クラブが開発センターと出水を視察

11月20～21日、屋久島農業青年クラブが農業開発総合センター果樹試験場と出水市の果樹農家3戸を視察した。ここ数年屋久島では、果樹新規就農者が増加し、知識・技術の向上が必須であった。そこで、視察研修を企画し、センターでは果樹の技術や試験状況を、出水の果樹農家では個人販売の取組や甘夏の省力化、食育支援など多様な観点から話を伺った。

参加者からは「新たな学びや気づきが得られた」などの感想が多く聞かれ、今後も担い手支援強化に向けた活動を展開する。

12月



屋久島町茶業振興会で視察の受け入れを実施

11月25日、屋久島町茶業振興会の生産者らと共に西之表市茶業振興会の視察の受け入れを行った。視察研修は、屋久島で行われている有機茶生産の生産方法や輸出の仕組みなどの事例を紹介した。現地研修では、秋整枝の方法や更新技術による病虫害防除について検討した。西之表市茶業振興会の生産者からは、積極的に質問があり、活発な会となった。今後も、熊毛地域の生産者らの意見交換する場を積極的に設け、熊毛地域での茶業経営の発展に貢献したい。

経営者クラブでの沖永良部研

11月27日～28日に、経営者クラブ会員及び関係者の合計6名で沖永良部島にて視察研修を行った。主にバレイショと花きの生産状況及び栽培技術、集出荷体系について、現地の生産者やJA職員から聞き取り等を行った。

沖永良部のバレイショ生産者は防風ネットによる強風対策や、ドローンによる農薬散布やトラクターや収穫機械等の大型機械の導入による省力化を積極的に取り組んでおり、今回の研修で学んだことを屋久島でも活用できないか、検討していきたい。

屋久島環境フェスタが開催される

12月7日、屋久島高校で環境フェスタが開催された。このイベントは屋久島高校生が企画し、環境をテーマにした活動紹介や小物製作体験ができるイベントとなっている。また、当日はオーガニックマーケットも催され、有機農産物やオーガニック食品の販売もあった。本課からは有機茶の販売支援と産官学連携で取り組んだ「とれ～るミックス」の販売支援として職員2名が参加した。1日のみの開催であったが、200名以上の来客があり、盛況であった。

1月



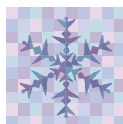
果樹新規就農者がお互いの園地を回る

1月24日、就農トレーナー研修として、たんかん園地巡回を行った。研修には果樹新規就農者5名、指導農業士、女性農業経営士が同行し、お互いの園地管理や施設機械の導入状況を確認した。就農後、他農家の園地を見る機会は意外と少なく、貴重な機会となった。また、指導農業士や女性農業経営士による的確かつ鋭い視点のコメントに新規就農者は耳を傾けて、熱心に聞いていた。今後は、関係機関と協力しつつ、各自が抱える課題改善に向けて、伴走支援を行う。

トレーナー研修（野菜）を実施

1月30日に、バレイショほ場にて就農トレーナー研修を行った。研修には新規就農者1名、指導農業士1名、普及員1名が参加した。研修ほ場では出芽率の低さが課題であり、指導農業士からほ場の排水対策や種イモの植え方・土寄せのタイミングについてアドバイスをもらった。

新規就農者はメモを取りながら熱心に話を聞いており、「来年は、今日もらったアドバイスを実行し、単収2t以上を目指したい」と語っていた。今後も、技術指導を行いながら課題解決に向けて支援していく。



有機茶生産者がコンサルティング会社の視察を受け入れる

1月27日、茶業振興会の生産者が屋久島茶のPRのため、コンサルティング会社の視察研修を受け入れた。研修は、室内研修と現地研修を行った。室内研修は、屋久島事務所から屋久島町の農業と茶の生産状況について説明し、生産者からは屋久島における有機茶の生産と販売について説明した。現地研修では、生産者のほ場で茶の管理方法について説明した。参加者からは、積極的に質問があり、活発な会となった。今後も、生産者らの視察研修を支援し、屋久島茶のPRに貢献したい。

県フラワーコンテストで屋久島のドラセナが県議会議長賞を受賞

2月20日、県庁で開催された県フラワーコンテストにおいて、屋久島町のドラセナ生産者がその他葉物・枝物部門（出品29点）で特別賞の県議会議長賞を受賞した。屋久島町では5戸の生産者が栽培面積約1haのドラセナを栽培している。個人で所有している系統も多く、様々な種類のドラセナが出荷されている。今回、受賞したドラセナは葉色の発色や品質、市場性などが高く評価された。今後も、高品質のドラセナの安定生産を支援する。

屋久島牛が分娩間隔の部で表彰される

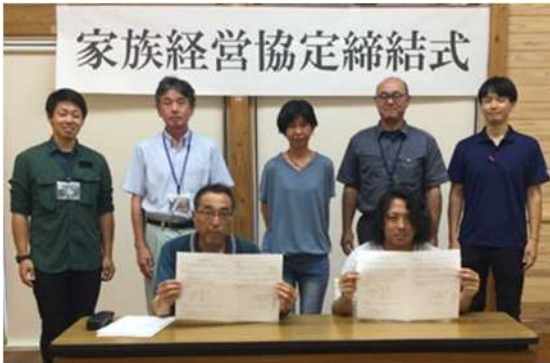
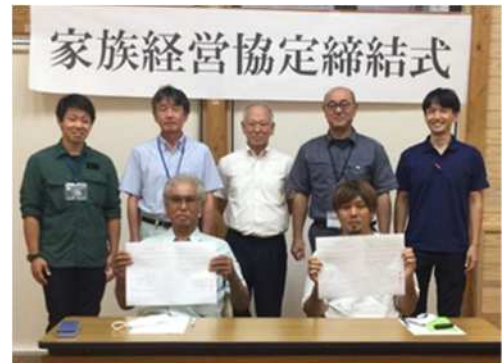
屋久島和牛改良組合は、令和6年度全国和牛登録協会主催の認定和牛改良組合表彰（分娩間隔の部）において、全国トップ15組合に選ばれ受賞しました。この表彰は、和牛の繁殖成績に基づいて優秀な組合を評価するもので、屋久島の平均分娩間隔は387日で、県平均の397日を上回り、繁殖効率や生産性向上が評価されました。屋久島の受賞は4年ぶりで、肉用牛繁殖経営の所得向上に大きく寄与する成果となりました。なお、県内では根占町、屋久島町、奄美本島の3組合が受賞しました。

【令和 6 年度 各種表彰】

表彰者の紹介

(1) 家族経営協定締結

和やかな雰囲気の中，農業委員や関係機関などの立ち合いのもと，2 組の農家が家族経営協定を結んだ。締結農家は「次代につながるよう，農業をやってきました。これから親子で力を合わせて頑張りたいです。」と力強く宣言した。



(2) 女性農業経営士認定

今年度，新たに岩川瑞恵さんが女性農業経営士に認定された。女性農業指導士は，農業経営や地域農業の課題解決に取り組み，地域のリーダーとなる女性を県知事が認定するものである。岩川さんには地域農業やむらづくり推進，また新規就農者などの身近な相談役としての活躍が期待される。



(3) 認定和牛改良組合にて分娩間隔の部表彰

屋久島和牛改良組合が令和 6 年度，全国和牛登録協会主催の認定和牛改良組合表彰で，分娩間隔の部において全国トップ 15 に選ばれ受賞した。平均分娩間隔 387 日と県平均を上回り，生産性の向上が評価された。屋久島の受賞は 4 年ぶりであった。



(4) 農山漁村女性活動功労者表彰

生産活動や地域活動の場に積極的に参加し、農山漁村の環境づくりや地域の活性化に功績のあった方として、日高ミツヨさんが表彰を受けた。

生活改善グループにおける、研修会や屋久島食の文化祭などでの取り組みや、地元高校等を対象にした郷土料理の講習会の実施などの活動を長年行っている。



(5) 県堆肥コンクール最優秀賞受賞

県が主催する令和 6 年度堆肥コンクールにおいて、宝珠産業が出品したバーク堆肥が最優秀賞を受賞した。出品した堆肥の品質においてとても高い評価を受けた。宝珠産業は過去にも受賞歴があり、2 年ぶりの最優秀賞受賞となった。



(6) 県フラワーコンテスト県議会議長賞受賞

県が主催する令和 6 年度フラワーコンテストにおいて、中井信司さんが出品したドラセナ（品種名：ベラ）がその他葉物・枝物部門で金賞及び特別賞の鹿児島県議会議長賞を受賞した。中井さんは有機物を活用した土づくりを意識して栽培をしており、葉色の発色や品質、市場性が高い評価を受けた。



令和 6 年度活動体制

熊毛支庁屋久島事務所農林普及課

鹿児島県熊毛郡屋久島町安房 650 番地

T E L : 0997-46-2236

F A X : 0997-46-3384

職 名	氏 名	担 当 業 務
農林普及課長	上村 光秋	課の総括
技術主幹(兼)農業普及係長	吉田 真一	係の総括，経営，地域営農，食育・地産地消
技術専門員	新川 裕樹	畜産，担い手育成，農業機械
技術主査	片山 隆之	茶，環境保全型農業，新規就農者育成
技術主査	佐藤 賀俊	作物，野菜，花き，病虫害，気象， スマート農業，農業情報，青年育成
農業技師	下村 正之	果樹，鳥獣